「歴史の陰に咲く、信念と慈愛の華」

正田　瑛理

講談「日向御前 国姫物語」の内容を聞いて、私は過酷な時代を自らの意志と智慧で生き抜いた国姫（日向御前）の生き様に深い感銘を受けました。徳川家康のひ孫にして織田信長や本多忠勝の血を引くという華麗な血統に生まれながらも、彼女の人生は決して平坦なものではなかったと思います。しかし、与えられた運命に翻弄されるのではなく、自らの足で立ち、周囲を慈しみながら未来を切り開いた姿は、時代を超えて現代の私の胸を強く打ちました。

特に私が印象深く感じたことは、彼女の決断力と柔軟な知性です。最初の輿入れ先が改易された後、自らの心に従って有馬直純との再婚を望んだ姿や、女人禁制であった愛宕山へ馬で駆け登り女性の参拝を解放したという逸話からは、旧弊にとらわれない快活で強い意志が伺えました。また、宗教的摩擦や家門の危機に直面した際には、聖書と仏典の双方を学んで領民やキリシタンの心に寄り添い、自ら家康へ手紙を書いて日向延岡への転封を申し出るなど、驚くべき聡明さと行動力を発揮していました。

さらに胸を打たれる場面は、彼女の遺した「想い」が没後もなお一族を救い続けたところです。臨終の際に言い残した「東照大権現を祀ること」や「成果である本多家との絆を保つこと」という遺言は、有馬家が後に一揆や転封という再度の絶望的な危機に瀕した際に、お家再興の決定的な導きとなりました。彼女の信念と深い愛情は、自身が亡くなった後も暗雲を払う光となり、最終的に有馬家を越前丸岡の地での繁栄へと導きました。歴史の表舞台で刃を交えた武将たちの陰で、慈愛と知恵をもって家族を守り、一族の未来を照らし続けた国姫。そんな国姫の物語の講談は、情緒あふれる語り手の伝え方を通してとてもわかりやすく表現されており、彼女の波乱万丈な生涯は、真の強さとは他者を思いやる心と揺るがぬ信念の中にあることを、私たちに静かに伝えてくれていました。私自身このような講談を聞くことがないので新鮮な機会でした。